小説 さかき傘
挿絵 フジヤマタカシ

立ち読み版

第一章　異端　――悪しき者、そうでない者――　006
第二章　可憐　――黒衣の修道女――　036
第三章　蟲　――解き放たれるとき……――　084
第四章　悪魔　――高慢なる精神の失墜――　124
第五章　姉弟　――愛は歪み、届かず――　156
第六章　ホーリナ　――汝、神に背をむけることなかれ――　187
第七章　雨　――それは天のこぼす涙――　244

登場人物紹介

Characters

鈴宮可憐（すずみやかれん）

普段は教会で孤児たちと暮らす、うら若きシスター。しかし悪魔ルビィを憑依させることで、悪魔の力を持つ戦士『カレン』へと変身する。

ルビィ

本名、ルビーホルン・ケル・ブリュンヒルデ。強大な力を持つ血筋の小悪魔。わけあって現在は教会で暮らし、可憐に力を貸す身。

プルトン

悪魔崇拝者たちを率いる老人。

川津（かわづ）

プルトンの部下の一人。悪魔を熱心に崇拝する小男。

ミコト

可憐とともに生育院に暮らす少女。教会騎士団、通称『ホーリナ』に憧れている。

シスター・麻理亜（まりあ）

可憐の育ての親。かつては最強のホーリナとして悪魔崇拝者と戦っていたが、現在は車椅子で生活する老女。

「――っっくぁぁ……っ」
それほど体重はかけられなかったが、異変をきたした子宮に圧迫感が加わるのは、単純な痛みより遥かに勝る苦痛だった。鈍く低い悲鳴をこぼす可憐は非難の目を男に向ける。
そしてそこで……。三日月のように歪んだ男の口元を見たとき、直感的に気づいた。
「椎名神父……。――貴方は椎名神父ではありませんね⁉」
高鳴る動悸に任せ、鋭く言い放つ。
確信に満ちた声を受け椎名神父は、いや椎名の形をした男は、にんまりと相好を崩した。
その顔がうねうねと融けるように形を変えゆくのを見て、可憐は驚きとともに、瞳に強靭な光を宿す。やはりこの一連の異常事態の原因は、ここにあったようだ。
「能なし神父のふりをするのもなかなか楽しめたが……、ククッ、私のように偉大な存在には、この若造では軟弱すぎましたね」
着衣が液体のように横に広がり、薄汚れたダークローブに変容するとともに、ハンサム神父の顔は無残なほどに品のない、年老いたそれへと変わっていった。右手には見覚えのある魔導具、変化の杖を持っている。
顔を見たのは初めてだが……。声音の質といい教会を蔑んだ態度といい、このいかにも貧相な老人が先ほどの恐るべき魔人、プルトンらしかった。
「こ、ここは神の家……。不届きな行いは許されません。いますぐ立ち去りなさい……」

「ククククク……。そうですね、確かに我々が行動を起こすには、場違いだ。だがだからこそ貴女が導いてやるべきでしょう。あの、哀れな子羊たちをね」

倒されたまま踏みつけられてもなお勇敢なシスターに対し、男は冷笑をもらしながら視線を横に向けた。

その先にいるのは子どもたちである。そしてその哀れな弱者たちは、つい数十秒前までと比べても明らかに様子がおかしかった。下腹部の異変にこらえきれず、一番症状の軽いミコトでさえしきりに腿を擦り合わせているのである。

「あんないたいけな子どもたちに貴女の媚態は、刺激が強すぎたようですよ？　ましてやシスターの体臭は、随分と芳しい香りがする」

「――⁉　ま、まさかさっきの……」

顔を青くする可憐。おそらく先ほど気絶させられたときだろう。彼女の肉体には、なんらかの媚薬が用いられたようだった。それどころか、話から察するにその媚薬は、匂いを介して子どもたちにも深く影響しているらしかった。

「ふぐ……っ。く……。あぁぁぁぅ……っ」

さらに事態は進行し、子どもたちは由宇のような例外を除き、体内を駆け回るムズつきが我慢できないらしい。全身に爪を立ててかきむしりだした。

彼らはマスターベーションに関して、やり方はもちろん、そういった方法があることす

ら知らない。自瀆という性欲を発散させるためだけの行いなど、教会で教えるわけがないからだ。それでも可憐のように一定の年齢になれば自然と耳にすることもあるのだが、少年少女らにそんな機会はまだない。

「ヘンだよ、苦しいよぉ……。助けてお姉ちゃあん……っ」

ボーイッシュな美少女、瞳が、泣き声で訴えた。彼女のほうを向き可憐は顔を青くする。少女の愛らしい顔や細い二の腕には、真っ赤な爪あとが走っていた。

衛生的にきちんと短く切られた爪では、肉芯の疼きを抑える手ごたえがないために力をこめてしまうらしい。血が滲むほどの強さで、自らの身体を引っかいているのだ。

愛する子どもたちの健康的な肌に走る傷あとに、可憐は失神してしまいそうなほどの恐慌状態に陥る。ちょうどそのとき、プルトンが邪悪な提案をする。

「幼い身体に傷が残るのも酷というもの。教えてあげましょうか。セックスのよさを」

「おっ、おやめなさい！　そんな破廉恥な……」

甲高い声で叫んだ可憐に対して男は、我が意を得たりとばかりいやらしい笑みを向けた。

「そうですか。では……。貴女が責任を取るのですね」

後半声の調子を落として、グロテスクな内面を覗かせた男は、倒れたままのシスターに手を伸ばすと乱暴にその胸倉を掴み引っ張っていった。合唱用の台の上で、ほとんどがしゃがみこんで自分のことに熱中していた子どもたちが、一斉に目を二人のほうに向ける。

「みなさん耳をこちらに向けてください。みなさんのそのムズつきを、ここにいらっしゃるシスターがなんとかしてくれるそうですよ」

陽介や瞳をはじめとする少年少女は、幼い身体に容赦なく降りかかる淫熱に、先ほどの可憐と同じく、頭が正常に働いていないらしかった。大声を出し呼びかける見知らぬ老人に対し、とろんと潤んだ瞳を向けている。

「それでは、私は邪魔をせぬよう聞かせていただきますかね」

二十一対の視線を向けられて肌を粟立たせる可憐を皮肉りつつ、男は数歩後退する。

「……それから先に言っておきますが、ブーツに仕込んだそれは抜かないでください。私としても下手に銃撃戦になって、部下たちに幼い命を奪わせたくない」

言いながら、視線を礼拝堂の隅へと泳がせる。

――七人。柱や椅子の陰に隠れる黒ローブの姿が見て取れた。注意して見なければ絶対分からない死角であることから、おそらく事件が解決されたと思い可憐がここに戻ってきたときには、すでにこの礼拝堂は、彼らの手中にあったらしい。

悔しげに歯噛みする可憐だが……。ルビィがいない以上、反撃のすべは絶無だった。生身でも優秀なホーリナである彼女だが、さすがに銃を構えた男たち七人や魔人を相手にして、子どもたちを守りながら一人で渡り合えるとは思えない。

いまは機を見て、ルビィが来てくれるのを待つ。だが、機を見るためには……。

「早くしてあげてくださいシスター。子どもたちが苦しんでいますよ」
弟妹に、性欲の吐き出し方を教えるほかない。
「く……」
後退した敵が視界から消え、子どもたちしか目に映らなくなったことで、逆に可憐は事態を理解して顔を真っ赤にした。弟や妹たちは座り込んだ姉の姿を不思議そうに見ている。誰もが眉根を寄せ、淫猥な衝動に困惑しているのがよく分かった。
マスターベーションの方法ならば、性的なムラつきに起因する少年犯罪予防のため、中学校の保健の授業で習っている。だが可憐は一度としてその行為を行ったことがなかった。信仰と婚約した修道女たちには性など永劫無縁の存在であり、まして生物的な繁殖を目的としない、快楽を貪るだけの行為など、禁忌以外の何物でもない。
それを……。いまから彼女自身が、弟妹たちに教えなければならないのだ。
タブーを破ること以上に、それがなにより恥ずかしかった。自堕落な指使いを、自分を姉と慕う子どもたちに……。
だが拒否すればあの悪鬼がしゃしゃり出てくるだろう。まだ精通すら訪れぬ少年と初潮も迎えぬ少女が、汚らわしい部分を重ね合う行為。そうした肉の絡みに一切免疫のない可憐は、想像するだけで吐き気を覚えた。
「み、みなさん……。これから言うことをよく聞いてください……」

痴女ととられても仕方のない大股開きの格好で、震えながら声をかける。
子どもたちは、このまったく理解できない状況と不可解な感覚から救ってくれるのは、彼女しかいないと思ったのだろう。ふらふらと夢遊病者のように危うい足取りで台から降りると、座り込んだ姉を取り囲むよう集まってきた。
誰かと目を合わせることに我慢できず俯いた姉に、弟妹たちの視線が集中する。
「……女の子は、私のすることに従ってください……」
座り込んだまま、汗に濡れてへばりつく黒いスカートをまくり上げていった。踵(かかと)に届くほど長いスカートの下から、こげ茶のレザーブーツと純白のシルクストッキングが覗く。その仕草に、夢うつつといった感じの子どもたちが、目の色を変える。
女の子たちは切なげに眉を寄せて、救いを求めるような弱々しい目で可憐の顔を見つめている。逆に男の子たちの視線は、すべてが開かれた脚のほうに集中していた。思わず膝を曲げ腿を閉じるシスターだが、ガーターストッキングに包まれた肉感的な脚のラインだけでも、幼い性を魅了するには余りある。
スリットの入った腰布を横にめくり腿を露出させると、奥部へと手を差し込み、下着に包まれた部分に触れた。
「――っっツぅっ！」
もともと敏感な部位であることは知っていたが、爪の先が触れただけで、痛いほどの電

流が全身を駆け抜ける。
だが子どもたちを怯えさせてはならないと、極力顔には出さず、もう一度その部分に指の腹を重ねてゆっくりと上下に這わせだした。ビリッビリッと鋭い痛みが身体を貫く。
「このように……、お、おしっこの出る割れ目を……。上から押してみてください……。自分で痛くない強さを見つけて、優しく上下にさすって——。……〜〜っ」
修道女にあるまじき発言をした恥辱で、背筋に寒気が走った。ただ先ほど、中途半端なまま投げ出されていた性感がもう一度疼きだし、思わず声を上ずらせるほどの悦感がこみ上げてきている。
スカートの中を弄ることを恥ずかしがっていた妹たちも、彼女が先頭を切ってくれたことで、むず痒い部分に触れゆるゆると掻いたり揉んだりし始めた。
「くぁん……っ。お、お姉ちゃん——。ヘン……、ここ、ヘンな感じ……」
「あふ……。あ……。いい……」
まだ控えめに、ショーツの上から指で押したりさすったりするだけの姉に対し、妹たちは着実に性感の芽を開花させていく。
やり方が間違っていないか不安げにスカートの裾を口に咥え、可愛らしい腿から、割れ目のラインが覗くほど水分を吸ったコットンパンツを姉に見えるようにする子。もう感覚の虜(とりこ)になったらしく、他のなにからも興味を失ったとばかりに目を伏せて、腿の間で両手

をもぞもぞと動かす子。可憐と同じように床に座り込み、スカートがめくれて丸見えになっているにもかかわらずパンツの中に両手を突っ込んでいる子――。

すぐ隣で、これまで寝食をともにしてきた少女たちが、いかがわしい行為に没頭しているのだ。姉の悩ましさにただでさえクラクラきていた少年たちは、もう全員が顔を真っ赤にするほど興奮していた。

フーッフーッと獣のように鼻息を荒くしながら、一歩進み出た陽介が、座り込んだ可憐の顔面に突きつけるようズボンを下ろして幼い勃起を取り出す。

（あ……っ……）

つい数日前、一緒に風呂に入ったとき見たものと同じはずの器官が目に入り、可憐は強烈な気恥ずかしさを覚えた。ズキッと痛いくらいに胸が高鳴ったのだ。それは弟に対する慙愧（ざんき）や、凶暴なオスの一面に対する恐怖ではない。俗世を捨てた尼僧の中の、捨てきれない女性的な部分が、胸をときめかせていた。

（や、やだ……。わたしったら……。なにを……）

さすがに精通前の少年のものだけあり、限界まで勃起しても十センチにも満たない。だが半分近く冠から顔を覗かせるほどパンパンに膨らんだ亀頭といい、へそにつきそうなほど天を仰ぐ勃起力といい、男性の凶暴さをしっかりと兼ねそなえていた。それに鈴口からは、わずかに先走りの透明な液体が垂れている。

「教えてよ可憐姉ちゃん。どうするのコレ。どうすればいいの？」
異常な次元にまで高まった興奮から、呼吸すら危ういほどに乱れた陽介が問いかけた。
「えと……。はい、その……」
ドキドキと鼓動を続ける胸が静まるよう、修道衣の黒い胸元を握りしめ、姉は少なからず潤んだ瞳を弟へと向ける。
「その……。しごく……。いえ、その……」
聖職者として意図的にそうした知識を避けてきた彼女だが、生来の気立てのよさから中学高校と友人が多く、自然とそうした話題に触れることもあった。おぞましい肉塊へと変貌したそれを前にして、戸惑いや焦燥も混じってしどろもどろになるが、それでも口を開く。だが妹たちに告げたときとは別種の、頬が熱く火照るような気恥ずかしさに苛まれ、先ほどよりさらに言葉に詰まった。
「しごく……、ってなに？　どうするの？　ねえお姉ちゃん」
「ぁ……。その、しごく……。というのは……」
頬につくほど近くまで腰を寄せてくる陽介に迫られると、鼻先を掠める生ぬるい青臭さを感じ、理性が模糊とした霧にかすんでいく。
自然と熱い吐息がもれ、半分だけ顔を出した亀頭部を甘くくすぐった。自分でも思いがけないほど抵抗なく手を伸ばした可憐の、しなやかで細い指が、グロテスクな肉槍の半ば

ほどを優しく包み込む。鋭くももどかしい刺激が走り、敏感な少年の腰がピクッと跳ねた。
「こう……。ぎゅって握って、それから縦に……」
優美な仕草で強張った陰茎に指が絡みつく。
「こうして……。ごしごしするん……、です……」
「あぁぁぁぁぁ……っ。可憐姉ちゃん……っ。ぅぁぁぁっ」
包皮の上から痛いくらいに敏感な亀頭を、柔らかな手のひらで包み、擦られて、少年の情けない喘ぎ声が礼拝堂中に響き渡った。
（あぁ……、主よ、お許しを……。お許しを……）
神の御前であり道徳を犯していると思うことが逆に危険な錯覚を起こさせ、可憐は説明を終えたあとも弟の性器に指を絡め続けている。
「くぅぅ……。ざ、ザラザラして……、ちょっと痛い。コレはずして」
「え……？　あ、ご、ごめんなさい」
白い布製の手袋が、敏感な部分を擦ってしまったらしい。可憐は左右の手袋をとると、自然と今度は両手で、硬い棍棒を握りしめた。
（熱い……。男の方……の……、こんなにも熱く……）
自然と半開きになった唇から、深いため息がもれる。
これまで何度か見たことがある器官だが、こんなにも逞しく変形した姿は初めてだった。

じかに手のひらで触れていると熱がそのままこちらの身体に伝わってくる。ゾワゾワと深い倦怠感に、火照り続けている子宮が痺れた。

先端の鈴口からねっとりした透明な滴がこぼれ亀頭部全体を濡らす。包皮を前後させると、ピンク色の先端粘膜が見え隠れするとともに、ニチュニチュといやらしい音が響いた。

初めて見る勃起した男性器に、可憐は困惑や気恥ずかしさとともに、倒錯的な感情を覚えていた。鉄の塊を皮膚が覆っているかのように硬く、それに熱い。

性交渉のときには、この凶器とさえ思えるものが女性の弱々しい粘膜を貫くのである。その様子を想像すると可憐は恐ろしいと思うのだが、身体はなぜか切なく震えた。

「ね、ねえお姉ちゃん。僕にもしてよ……、陽ちゃんだけなんてずるいよ」

陽介の身悶える様を見て、他の子どもたちと違い性の快感を知っている由宇が切羽詰まった様子で擦り寄ってくる。

生臭いオスの臭いが鼻腔に絡みつくだけで、可憐はまたしても子宮が大きく鼓動するのを感じ取った。無垢なシスターは胸を猥褻な思いに占められ躊躇したが、待ちきれないといった感じの由宇が泣きそうな顔をしているのを見て、意を決し陽介のものに絡めていた十指の半分をそちらに伸ばす。

（うわ……ぁ……。こっちもすごく熱い。それに陽くんのと違って……）

熱く膨張した雄器は、陽介のそれとはまた違っていた。十センチ足らずと短いのだが、

幹部も雁首も異様なほど張っていて太く、包皮が完全にめくれてしまっている。それに根元には青紫の血管が浮き出て、感触がはっきり分かるほどデコボコしていた。
少しずつ力のこめ具合を覚え、少年たちが最も苦しみを忘れる加減で熱い硬肉をグシグシと強めにしごく可憐。その瞳は甘く潤み、目元がぽぅっと色っぽく赤らんでいた。二つの芯棒から発せられる磁石のような引力が、子宮にふわふわと頼りない疼きを与える。じーんと股の下に渦巻く熱っぽさのせいで、全身が痺れてしまいそうだった。
一方の陽介と由宇は、大人の女性の肉を昂ぶらせているとは知らず、体中で最も敏感な部分を触られる快楽に酔いしれている。
むずむずと痒みにも似た疼きが、ペニスの根元辺りで渦巻いていたのだが、幹を力強くしごかれていると、それがすーっと薄れていくようで気持ちよかった。それに姉のいつも通り温かで柔らかい手のひらが、先端のつるんとした部分を圧迫すると、思わず腰が抜けてしまいそうなほど甘美な電流が走り、お尻から腿の辺りまでが満たされる。
「ぼ、僕も。可憐姉ちゃん。ムズムズしておかしいよ。なんとかして……」
「おちんちんが、おちんちんがヘンになりそうだよぉ……」
オスの本能的な部分で、自瀆行為よりも美女の肉を選んだ少年たちが、一斉に姉の周りへと集まってくる。
二十一名の子どものうち、男子全員にあたる九人分の性器が視界を覆いつくして、可憐

は頬を真っ赤にした。一緒にお風呂に入っているときは気づかなかったが、九人には九人分の個性がある。その違いを見つけるたびに姉は、弟たちを貶めたようで心苦しさを覚えるとともに、異様としか思えない興奮に苛まれた。

だが罪の意識を覚え、もう見ないようにと瞼を伏せると、そのことが陽介と由宇を除く七人の嫉妬を買う。

もともと姉は両手がいっぱいなので分かっていたことだが、先着の二人になれなかったことが悔しいらしく乱暴な仕草で、その身体に剛直を押しつけだした。

「ふぁ……っ、あぁんっ。や、やめなさいみなさん……、ンっ、ンン……っ」

手にしているだけで情けないほどに倒錯してしまう淫らな熱を、さらに七つも体中のいたるところに触れさせられて、可憐は淡く鼻にかかった声を出し、首を横に振る。

少年たちはそれぞれ、腋や肘、それに膝といった箇所へと熱化したペニスを挟ませると、シスターの教え通りごしごしと擦りだした。

（あっ、あついぃぃ……っ。おちんちん熱い……っ、すごく……っ、あつ……っ）

両腋と肘に合わせ、左腿を持ち上げられて膝にひとつ、身体が捻れているためかすかに浮いたヒップにひとつ。計六つの雄熱が、シスターの中の牝を焦がす。

最後に一人あぶれてしまったのは、やや小太りで、そのぶん由宇よりもさらに野太いペニスを持つ武（たけし）という少年だった。どこに混ざろうかと悩んでいたが、やがて修道衣では押

さえきれない豊潤な丘に目をつける。たふたふと重たげに揺れる両の乳房を掴むと、腰をかがめ、黒い着衣に覆われた谷間へと肉幹を滑らせた。

「だっ、だめぇっ。おっぱい掴まないで武くん……っ。おっぱいは、おっぱいはぁ……っ」

陽介や由宇のような特別待遇には及ばないが、少年たちの青い性欲ならば充分に満たせるほど、可憐の肉体は魅惑的な要素をそなえている。火照った肉はどこをとってもつきたての餅のように柔らかく、過敏な男根全体が包まれているような心地よさだった。それに片脚を上げたため、スリットの入ったスカートがめくれてしまい、純白のショーツが丸見えになっている。すらりと長く、それでいてむっちりとした肉付きの美脚がなんとも蠱惑的で、見ているだけでペニスをじんわりとした快美感が包んだ。まして武が乱雑に胸を揉み始めるとしなやかな肢体が頼りなげに蠢き、柔らかでもちもちと弾力に満ちた肌が、少年たちの性感をさらに追い詰める。やがて女の緩やかなカーブを描く鼻梁の先からは熱い息が漏れだし、両肘両脇を閉めているため胸丘が必然的に寄せ上げられ、男に媚を売るような仕草になっていた。

九人の幼いオスから伝播した熱に狂わされ、いつもなら肩がこる邪魔な部分としか思っていなかった肉たぶが、いやらしく震える。武が谷間に埋没させた硬肉に、蕩けるほど柔らかな感触をぐにぐにと擦りつけだすと、腰の奥のほうまでが熱くてたまらなくなった。思わず腰をよじっては、お尻の下で柔肉を楽しむ、亮平（りょうへい）という少年を楽しませる。

格好が異なるだけで姿かたちは彼女らの姉となんら変わらないカレンだが、ルビィの魔の気配が混合されているため、常人では外見から正体を悟ることは不可能である。そのことで少年たちの間には相手への畏怖があり、先ほどのように甘えてはこなかった。

だが逆に、性に関する知識があり、姉に対してそれを求めるのは遠慮するだろう由宇が、如何なくその技巧を発揮してきている。

「ここ、コリコリしてるよ……。それに心臓もドキドキ言ってる……」

「く……っ。まっ、待ちなさい由宇くん――っ。触らないで……」

胸から伝わる痺れはだんだんと熱いものに変わっていく。硬いエナメル素材の上から乳首を探りあて、ゆるゆるとまさぐる少年の指遣いに、女はこみ上げてくる形容し難い感覚を、必死で押し殺した。

父親に性虐待を受け育った由宇は、父親と、彼の連れてきた数十人の母親への奉仕術を仕込まれている。そうした過去の悪癖が表に出ているようだった。他の少年たちは性欲を感じれば解消したいと思うだけだが、彼の場合、解消するため相手に施しをするのだ。

「あっ、あっ……。くぅう……。そ、そんな……、いっ、ィ……」

ただでさえ敏感な上に、魔導具によってさらにおかしな感覚を刻まれた胸肉を揉まれ、ものの数秒で教会騎士は声を上ずらせだした。三十路を超えたホステスの『母親』たちを悦ばせた奉仕は、女体の性感のツボを完璧に心得ている。

「だ、ダメ――、やめなさいっ、由宇くん……っ。やめなさいっ」

両足は絨毯に張りついているが、両腕は自由なままである。相手は由宇一人であるため、力ずくで振りほどけなくもないだろう。しかし乱暴なことはできないという思いと同時に、どうしても身体を脱力させるような感情が湧き起こっていた。

魔族から与えられた着衣に覆われたままの肉たぶが、背中に抱きつき腋から伸ばされた由宇の手で外へと引っ張られる。突きたてのお餅のようにくにゅくにゅと弾力に満ちたそれをリズミカルに揉み回しながら、先端で着衣を持ち上げるほどしこり立ったポッチを摘んだ。重たげな肉の塊は、少年の非力な手により卑猥にたぷたぷと揺れる。

乳房が揺れるだけで、ジンジンと熱い電流が頭のてっぺんまで駆け上がる。特に先端の突起がひどく敏感で、つねられ、揉み込まれると、頭の中が真っ白になりそうだった。いつしかカレンは、エナメルのキュッキュと擦れる音に合わせ、鼻先から甘い音色を響かせだしている。

（な、なぜ？　どうしてしまったんですの？　わたしのおっぱい……）

先ほども武に同じようなことをされたが、こみ上げてくる性感は、受ける側が過敏になっていることと、与える側が熟練していることで、桁違いだった。

指先が革着の上をツーッとくすぐるように伝って、やがて両胸の深い谷間に行き着く。甘美な弾力に人差し指から小指までを軽く食い込ませながら、埋もれていたボタンを外し

た。その途端、パツッと音を立てて白衣は左右へと弾け、バストが露わになる。
光沢に満ちたエナメルのそれとは違う、ミルクを溶かし込んだようにねっとりとした白さの乳房だった。肌の火照りに合わせてやや薄桃色に染まっているのが艶かしく、取り囲んで事の成り行きを見守っていた少年たちの目の色が変わる。それに硬くなった乳頭の鮮やかなピンクが、昂ぶった青い性欲を煽ってやまなかった。
「……おっぱいすごいよ。すごく柔らかくて……、綺麗で……」
「ンふぁ……っ。だ、ダメだったら……。由宇くんっ、い、いい加減になさい……っ」
由宇相手にはこれまで出したことのない叱り口調で、なんとか少年の性欲を止めようとするカレン。しかし相手に聞く気がないうえ、声音がひどく上ずっており迫力がまったく感じられず、効果は絶無だった。
それに加えて、甘く乳肉を揉みほぐされているうち、シスターの身体は次第に、優しく高みまで引き上げられだしている。先ほど魔界蟲が這い出てきたときのような乱暴なものではない。ひどく緩やかで、それでいて抗い難い感覚が、彼女の理性に霞をかける。
「ククー――。感謝なさい。出産の次の段階であり、女性では生涯味わえない感覚ですよ」
ゲートを開くため床に杖を突きたてると、何事か呪文を詠唱していた老人が、好色そうな笑みをこちらへと向ける。だが女には、その言葉を解するだけの余裕はなかった。
（な、なに……？　なんですの……？　く……、るっ。なにか……、なにかが来て――）

ぐぐぐっとただでさえ若々しい張りに支えられた胸丘が、乳首を中心として持ち上がっていくような動きを見せた。少年の緩やかで容赦ない手の、指の動きが、胸肉の奥にあるきわめて敏感な部分をダイレクトに刺激してくる。歯を食いしばったカレンは礼拝堂の天井を仰いだ。白い喉から低く鈍い声が迸る。

「あああああああ……。かは……っ、あぁぁぁぁぁぁ――！」

未知の感覚が乳肉の内側でジンジンと狂おしく渦巻いて、女は目を白黒させながら大きくかぶりを振った。全身のいたるところから、ひどく熱い液体のようなものが胸に集まってくる。それが体中を駆け抜けると、頭の中に靄がかかるほど濃密な快感が湧いた。さらに胸まで押し寄せた灼熱は、乳首へと流れ込み、そこから外へ出ようとする。

それだけで震えてしまうほどの淫悦を伴った熱が、全身からすべて乳肉に集中したのである。乳房の根元から先端へとそれがこみ上げていく感覚に、カレンは頭の中が真っ白になる思いだった。

そしてとうとう、熱は凄まじい悦びに身悶えする肉感的な女体から外へと飛び出す。

「ふぁは……っ。ひぁっ、ひはぁぁぁぁぁぁぁっ、あぇあああああああッッ!!」

ぴゅしゅるるる……っ。ぴゅるっ！　ちゅぴゅるるるるるるっっ！

熟れきって、しかし若々しさも留めた豊満な乳房の先端から、白い液体が噴き出した。

「うわっ……。お、おっぱいが出た……っ」

感動したように身を乗り出した由宇が左の乳首に吸いつく。口腔にとくとくと注がれる、甘美な芳香のさらさらした液体は、紛れもなく母乳だった。

陰湿な老人の及ぼした『変化』は、これを意味したのだろう。だがカレンの様子は、出産の次の段階というには明らかにおかしかった。

全身のいたるところから乳房へと集まってきた快楽の奔流が、今度は乳首から逆流し始める。それは先ほど魔界蟲をひり出したときとはまったく異質の、だがやはりこらえ難い絶頂感だった。

「あ……っ、あ……っ。……あへぁ……。ふぁ……」

つま先から頭のてっぺんまで、熱とも寒気ともとれる快楽の衝動が突きぬけ、女は声も出せずその場で十秒ほどビクビクと震えていた。やがてその動きが収まるにつれ乳首から出るミルクも少なくなっていく。

「――……な……、ン……、ですの……？　いまの……」

頭の中が真っ白になるような衝撃に、カレンは呂律の回らない声で言った。授乳の感覚がいかなるものか知る由もないが、いまのそれが違うということははっきりと分かる。母から子への行為というより……、先ほどの、絶頂の最中にしてしまった放尿のとき覚えた……。

「どうです？　それがこの少年たちの欲求そのものですよ」

「そう……。可愛い子ね……」

触手たちや老人に命じられたわけでもなく、カレンは自然と一歩を踏み出した。股のちょうど真下に、天井を向いた硬槍を持ってくる。そして躊躇いの色をほとんど見せず、むしろその表情に婀娜(あだ)めいた艶を覗かせながら、腰を下ろしていった。

恥肉にオスが触れた途端、カレンは、ゾクゾクッと胸の内が震えたような気がした。少年自身でさえ片手では指が回りきらないのではと思うほどの太さがあるためか、その熱量も凄まじく、敏感な粘膜が触れるだけで火傷してしまいそうに熱い。

とても入らない……。そうは思っているのだが、身体のほうはすでに入り口へと狙いをつけた侵入者に対し、歓迎するように、すでに奥で爆ぜた八人分の精子が混じった蜜汁を溢れさせる。それは幹部を伝って、少年の腰まで垂れ落ちるほどの量だった。

（わたし、ダメ……）

八名と関係を持ったときも胸を貫いた背徳感がこみ上げる……。だがいまの彼女は、それに対して、許されざる高揚感を覚えていた。膝に絡む触手の力が緩まると、自ら腰の位置を調節して野太い男根を迎え入れやすい格好をとり、身体を沈めていく。

ずぶずぶと最奥部まで弟が潜り込んでくるにつれ、女は背を仰け反らせ、途切れることのない媚声を振りまきだす。これまでとは比較にならない、圧倒的な存在感だった。すでに八人と関係を持っているとはいえ、つい先ほどまで処女だった女の秘中には容量が大き

すぎて、半ばまで咥えるだけでも粘膜が裂けそうになる。
それでもより深くまで呑み込もうと、秘苑全体が貪欲なうねりを見せた。ひだひだがぴったりとオスに絡みつき、ざわざわと蠢いて奥まで誘い込む。女の理性が壊れるにつれ、肉の牝部位もまた、清楚なシスターの仮面を捨て去りつつあった。
百合の花のように清らかな美貌に淫らな紅が差した表情には、法悦の喜色が浮かんでいる。そのまま腰をよじらせると、とうとう根元までの深い密着を終えた。
「あぁ……っ。〜〜〜〜っっ……。ふ、ふと……、それに深くて……」
背筋を折れそうなほどしならせて、最後まで一体化を済ませた衝撃を噛みしめるカレン。結合しただけでこれほどの圧迫感、満足感を覚えるのは、前の八人ではありえなかった。異物を迎え入れるため粘膜が限界まで押し分けられており、牝の官能スポットが余すところなく抉られる。
「はぁ……、気持ちいいよお姉さん……。それにココ……、ふかふかしてて……」
ふわふわと途切れかけていたカレンの意識を戻させたのは、姉と同じように恍惚の様子で喜悦に酔いしれる弟が、彼女の乳房に両手を伸ばしたためだった。
少し指先に力をこめるだけでつぶれてしまいそうな胸肉を、もう一度ぐにぐにと揉みしだきだす。中で溜まりに溜まったミルクが氾濫し、乳腺が痛いほどジンジンと疼いた。だが先ほどはあんなに狂わされた感覚を、カレンはどこか余裕を持って受け止めている。

「おっぱい欲しいの……？　武くん、お姉ちゃんのおっぱいそんなに好きなの……？」
弟と貪り合う反道徳的な快楽に満たされたカレンは、淫靡としか言いようのない、妖しい微笑を浮かべた。そして彼の望む通り、上体を前に寝かせていく。少年の顔を、その見事なバストで押しつぶす、前屈姿勢だった。
「ふぁく……っ。あっ、あぅぅぅ……っ」
前屈状態では自然と脚は先にいくほど持ち上がり、逆に腰に重心が移動する。そのため、もう限界かと思われた膣肉はより深くまで巨根を呑み込んだ。さらにお尻を後ろに突き出しているため、ぬるぬると抉られる肛門にまで、また新たなる媚悦が生じだしている。
「へへっ。すごい大きいおっぱい……。このおっぱいが好きなんだ」
優美で柔らかな園へと顔をうずめた少年は、先ほどまでよりさらに荒々しく胸肉全体を揉みしだき始めた。相変わらず乳輪には親指を食い込ませ、さらに両の乳房をたぐり寄せると、わずかに顔を見せている乳首の根元を、刺さっている触手ごと頬張り、吸い上げてきた。
「ぁう……っ、あーんっ」
下腹部に太杭を打たれたまま、上半身の性感帯を弄ばれ、シスターは甘ったるい声音で呟いた。胸丘から発せられる射精への欲求と、アナルを弄られる被虐の性感が、膣肉にめりこんだ肉芯によって何倍にも増加される。限界まで張った乳房がさらに、来るべき噴乳

の瞬間にそなえてぐぐーっとはちきれんばかり膨れ上がった。
「ふぁはっ。お、お姉さんっ。僕もう出ちゃいそう……っ、出ちゃうよぉっ」
姉の弾力に満ちた膣粘膜に、外の空気にさえ初めて触れたばかりの亀頭が熱く絡みつかれているのである。女性美の象徴ともいうべき柔らかで温かなミルクの膨らみに顔を押しつぶされながら、少年が狂おしく喘いだ。
「い、いいのよっ。出してっ、お姉ちゃんの一番奥にいっぱい……、いっぱいかけてぇっ」
巨大な肉棒とめいっぱいまで合致しながら、絶頂の予感を覚えたカレンはしきりに身を揉み、蕩けるように女らしい肢体をくねらせた。乳丘を少年の顔に擦りつけながら、腰を回して膣肉のいたるところで、埋め込まれた剛直の硬さ、熱さを味わう。特に菊座をほじくる舌が暴れだすと、豊かな牝尻全体が悦びにぷりぷりと弾んだ。
（いやぁ……っ。もうイクッ、イッちゃいたいっ。あそこも、お尻も、おっぱいも……、全部こんなに気持ちいいのにイケないなんて……っ。もういやっ）
少年の巨根が作り出す魔悦に、とうとう最後の理性までも搾り取られたカレンは、胸の谷間に溺れる弟に向かって、媚声を上げる。
「武くんっ。武くん……。射精してっ。お姉ちゃんの……、お姉ちゃんの子宮にミルクかけてぇ……っ。は、はやくぅぅっ」
はしたないおねだりとともに、女の膣肉もまた弟のエキスを搾り取ろうと蠢いた。

ただでさえ隙間なくぴっちりと密着していた膣壁が、さらに窄まって男根全体を痛いほどに締め上げる。それでいてぐんにゃりと蕩けるように柔らかな粘膜が、普段包皮に覆われて敏感な亀頭部や雁首にまとわりついて、うねうねと擦り上げた。
いかに巨根の持ち主でも、まだ子どもに過ぎない武は、その動きであっという間に追い詰められる。
「うぁ……っ。ふ――。でっ、でるっ！　出るぅぅっ！」
腰をそらせて、亀頭の先端を女の最奥にまで届くほどめりこませる少年。
――どぶるっっ！　ぶぶく……っ！　びゅくくくっっ！　ぶりゅるるるっっ！
「ひ――っっ。あぇあぁぁぁぁぁあああああああああぁぁぁあぁぁああああッッ‼」
九人の中で最もすごい量と勢いの射精だった。奥壁が痛むほどの水流で、粘質液が子宮へと吹きつけられているのを感じる。
喉も裂けんばかりの絶叫を放ちながら、背を仰け反らせて格好を騎乗位へと戻し、雄汁を受け止めていくカレン。そしてそこに、約束されていた解放感が与えられた。
にゅぽっと水気を交えた音が響き、乳首の先端に潜り込んでいた触手針が抜き取られる。
「……っつふぃあ――――ッッッ！」
限界点までせり上がってきていたものが、一瞬の間を置き、一気に溢れ出す。
ぶちゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅっっ！　じゅぶぶっ、どびゅるるるるるっっ！

「～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ッッッッ‼」
牛乳よりも遥かに濃厚な白いミルクが、一メートル以上も離れたところへと降り注いだ。
「あぁぁぁあああああっっ！　あぅ……っ、あか――っっ！　あっ！　あっ！　あっ！」
溜めに溜め込んだものが、凄まじい奔流となって薄桃色の乳首から噴出していく。
魔界蟲を出産したとき覚えた喜悦の臨界点を、遥かに超えた高みにまで押し上げられ、しかも降りてこられない……。カタルシスにも似た感覚の嵐に、カレンは悲鳴を上げながらブンブンと首を横に振った。つられて乳房が重たげに揺れ、放物線を描く母乳があたりに降り散っていく。
「かはぅ……っ。ぁう……っ。あぁぁぁぅっ！」
タプンタプンと身体の揺れよりワンテンポ遅れて往復しながら、豊潤なバストが濃厚なミルクジュースを放出し続ける。乳首の穴が広がるのではと思うほどの水流だった。
真っ白になった頭の隅で、子宮に吹きつけられるザーメンが勢いを失っていくのを感じる。そのまま芯棒がぐんにゃりと軟化すると、彼女自身もまた全身から力が抜けて、少年の上に倒れ込む。
放乳の勢いは収まらず、満杯のペットボトルを逆さにしたように、だくだくと少年の顔を白く染めていった。
「うぁ……。おっぱい……。おっぱいだ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円（税込）

目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていた

［小説：狩野景／挿絵：天鬼とうり］

全国書店で好評発売中

平凡な少年が女体化!
鬼に狙われた従姉妹を護れ!!

オトミコ！ 僕は男の巫女娘

［小説：大熊狸喜／挿絵：大空樹］

全国書店で好評発売中

男の子と女の子――
二つの性の間で揺れ動く
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

呪詛喰らい師2

［小説：蒼井村正／挿絵：或十せねか］

全国書店で好評発売中

凄腕退魔士の咲妃を
牝奴隷に堕とす
新たな敵の登場!

既刊LINEUP 全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガッ! ①～③
- ビルグリムメイデン ①～③
- 不死の吸血鬼がドSのご主人様を募集しているようです
- 思春期なアダム ①～④
- 呪詛喰らい師【カースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢クリス ①～③
- 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売） FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!